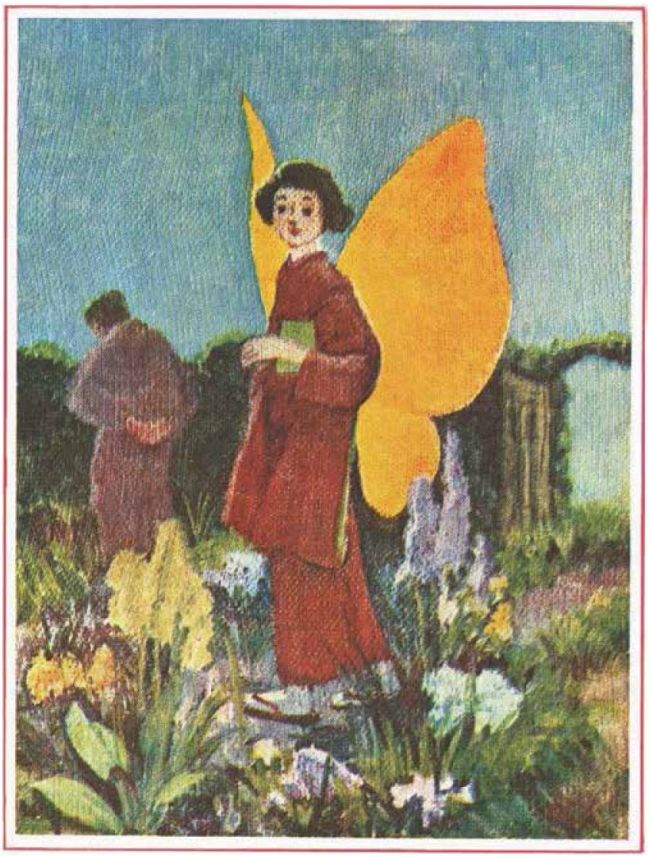
挿絵の魅力（「月夜と眼鏡」）



未明童話が得た幸せの一つは、多くの挿絵画家によって未明の童話が愛され、美しい挿絵が童話に添えられたことでしょう。

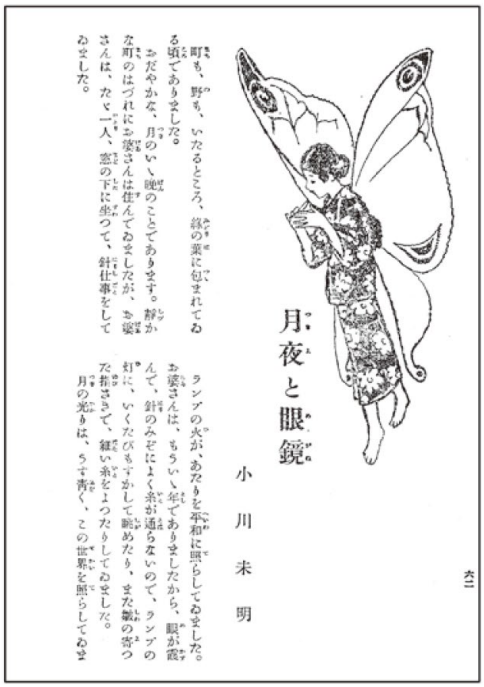
童話の挿絵が読者に与える影響は、絵を主体とする絵本の、絵と言葉の組み合わせが読者に与える影響と似ています。童話の文章の意味を補助する控えめな挿絵もありますが、挿絵の魅力が読者を捉え、挿絵のイメージに導かれるかたちで童話が読まれ、読者に強烈な印象を残す挿絵もあります。

文学の芸術性と挿絵の芸術性が同居した時代が、大正時代の後半でした。子どもの純真な心を大人の心のふるさとと捉え、芸術性の高い童話や童画を描こうとした童心主義の潮流が、〈童話の時代〉と〈童画の時代〉を結びあわせたのです。

左の絵は、大正 7（1918）年創刊の童話雑誌「赤い鳥」（大正 11 年 7 月号）に掲載された、未明童話「月夜と眼鏡」のために描かれた口絵です。これは、雑誌冒頭の目次に続くところに、当時、「赤い鳥」の表紙絵や挿絵を一手に描いた清水良雄が描いたものです。

見開き左の頁にこの絵は置かれ、右の頁に「月夜と眼鏡」の結末部の文章が引用されています。「月夜と眼鏡」のクライマックス場面が取り立てられ、それに挿絵を添えるかたちで、紙面が構成されたものです。

「月夜と眼鏡」は、月のよい晩、おばあさんが家で針仕事をしています。針の穴に糸が通らないので困っていると、眼鏡売りがやってきて、おばあさんに眼鏡を与えます。やがてまた戸をたたく音がするので、出てみると今度は女の子が立っていました。女の子はおばあさんに言います。「町の香水製造場で働いているのですが、石につまずいて怪我をしました。」おばあさんが眼鏡でその女の子を見ると、それは胡蝶でした。おばあさんは、家の裏庭の花畑へ胡蝶を案内し、そこでゆっくり休むよう胡蝶をうながすという話です。



月夜と眼鏡

小川未明

町も、野も、いたるところ、緑の葉に包まれてゐる頃でありました。

みだやかな、月のいい晩のことであります。静かな町のはづれにお婆さんは住んでゐましたが、お婆さんは、たゞ一人、窓の下に坐つて、針仕事をしてゐました。

ランプの火が、あたりを平和に照らしてゐました。

お婆さんは、もういい年でありましたから、眼が霞んで、針のみぞによく糸が通らないので、ランプの針に、いくたびもすかし眺めたり、また鬢の寄つた指さきで、細い糸をよつたりしてゐました。

月の光りは、うすく青く、この世界を照らしてゐま

六二

右の絵は、同号「月夜と眼鏡」本文のタイトル右肩に描かれた挿絵です。こちらも清水良雄の絵です。胡蝶の羽根をもった少女が、手をいたわるように空に浮かんでいることが分かります。（上の口絵も右の挿絵の少女も、ともに着物をきています。）タイトルや書き出しの文章からは、この挿絵の意味はつかめません。読者はこの挿絵のイメージを頭のすみに置きつつ、「月夜と眼鏡」を読んでいくことになります。

＊　＊　＊

当館では、挿絵をふくむ童話雑誌の現物を数多く所蔵しています。これらを通して、未明童話の挿絵の魅力も皆さんにお伝えしたいと考えています。

〒943-0835 新潟県上越市本城町8番30号（高田図書館内）　Tel：025−523−1083　E-Mail：mimei@city.joetsu.lg.jp